Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ
Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database
https://twinkle.repo.nii.ac.jp

(シンポジウム「看護を実現する人間関係の成立と発展」)心の回復を支える看護における人間関係の構築

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 畠山, 卓也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032078

心の回復を支える看護における人間関係の構築

畠山　卓也
（公益財団法人井之頭病院　看護科長・精神看護専門看護師）

私が一人ひとりの患者さんとのかかわりのなかで大切にしてきたことは、患者さんの回復を手助けできるようにささえることです。とりわけ、患者さんと分かち合うことを大切にしてきました。患者さんと分かち合うことは決して容易なことではありません。私は患者さんと分かち合うというプロセスにおいて、「当たり前を疑う」「希望に添う」「力を信じる」「お互いの役割を果たす」という 4 つの概念が鍵を握っていると考えています。

私たちが患者さんと分かち合うために、一番の障壁になっていることは、私たち一人ひとりがもっている「当たり前の感覚」です。いわば、これは私たちにとって普通の…意識しない…感覚のことを言います。私は、患者さんの拒否や怒りに遭遇したときに、自分のもっている当たり前の感覚で患者さんとかかわっていることに気づかされました。私は、「立ち止まって考えてみること」「患者さんに聞いてみること」で自分の当たり前を疑い、患者さんの感覚に近づこうとすることが重要だと考えています。私たちは、時として患者さんの不可解な行動に直面し、私たちの不安が喚起されると、ついつい抵抗を示してしまうことがあります。そんなとき、私はあえて患者さんの言いなりになってみる、言い換えると患者さんに意図的に巻き込まれることで、患者さんの思いを汲み、理解しょうと試みることにしています。患者さんの示す行動や言葉には、私たちの想像をはるかに超える意味を含んでいることがあるのです。私たち看護者は、病気や障害をもつ人を援助の必要な人とみなしていることがあります。確かに、病状の悪いときは、多くの支援を必要とするかもしれません。しかし、その一方で、私たちは“患者さんが病気になるまでに育んできた力”に目を向け、その力が発揮できるように支えることが大切です。例えば、得意なことや強みは、病気や障害を抱え生活していくうえで役に立つことがたくさんあるのです。私たち看護者に役割があるように、患者さんにも役割があります。多くの病気は慢性経過を辿ることが多く、患者さんは病気や障害とともに生活できるようになることが求められています。移り変わっていく状態のなかで、患者さんも看護者もお互いの役割が発揮できるように支援することが重要です。

トラベルビーは、「看護とは、対人関係のプロセスであり、それによって専門実務看護婦は、病気や苦難の体験を予防したり、あるいはそれに立ち向かうように、そして必要なときはいつでも、それらの体験のなかに意味を見いだすように、個人や家族、あるいは地域社会を援助するのである」と定義しています。この目的を達成するためには、看護者は患者との人間対人間の関係を確立すること、治療的に自己を活用することを必要とします。本稿で提示した 4 つの概念を整理し、トラベルビーの人間対人間の関係の確立とどう関係しているのかというと、「当たり前を疑う」は最初の出あいの位相、「希望に添う」は同一性出現の位相や共感の位相、「力を信じる」は同感の位相、「お互いの役割を果たす」はラポートの段階で活用しています。自己を治療的に活用するためには、患者さんとの関係性のなかで、内省を繰り返しながら、意図的に患者さんの世界に巻き込まれることが重要です。そして、このプロセスそのものが、患者さんの回復に良い影響を与える関係づくりになっていると言えるでしょう。